ウェーリー訳黎庶昌「卜来敦記」考

張　偉雄

（一）

ロンドンからまっすぐ南に80km程の所で、イギリス海峡が眼前に広がる東西にのびた海岸沿いにブライトン（Brighton）という街がある。元は漁師と農家だけの小さな村であったが、1753年、ラッセル博士が塩水と海風を含んだ空気が健康に良いと、ブライトンの地を推薦した事で一種のブライトンブームが起こった。1787年、プリンス・オブ・ウエルズ（後のジョージ４世）がこの地を気に入り、東洋趣味をふんだんに取り入れた夏の離宮ロイヤル・パビリオンを建てるに及んだ。19世紀終わりにブライトンは英国屈指のリゾート地となり、英国の名士たちがこぞってこの地を訪れるが、その中に一人の中国人外交官も1877年に、この地を訪れた。その名は黎庶昌である。

黎庶昌は清朝道光17（1837）年に、中国の貴州遵義に生まれた。曽国藩などに師事したのち、1876年駐英公使館参賛として英国に赴任した。ドイツ、フランス、スペインなどの駐在参賛を歴任したのち、1881年日本駐在公使として日本に赴任してきた。西洋滞在の５年間、彼は見聞を広げ、西洋に対する理解を深めた[1)]。

黎庶昌は19世紀の中国人に英国のことを紹介する意味で、この英国の景勝地ブライトンを『卜来敦記』に描いた。そして、東洋学者のアーサー・ウェーリー（Arthur Waley）[2)]が20世紀のイギリス人に「A Chinaman's Description of Brighton in 1877」として、黎庶昌の『卜来敦記』を「PU-LAI-TUN」と題して訳した。

（二）

黎庶昌は桐城派[3)]を文章の師として「言有物、言有序」の立派な文章を

書く人である。彼の文章は文字が簡潔であるが、文脈が整然としており、主張も文章に十分盛り込まれているものである。『卜来敦記』は彼の文章風格と思想をよく表したものであり、文章は短いものであるが、絶句詩でも書くように、起承転結によって文章を区切り、明快に自分の感想や、主張をまとめている。本論はアーサー・ウェーリーの『卜来敦記』の英訳をツールにして、黎庶昌の原文の真意を浮き彫りにするものである。原文と訳文との間の比較には、原文だけでは読み取りにくい元作者の深意を浮かばせるという有効性が存在する。次に黎庶昌の目に映った1877年のブライトンを見てみよう。

文章のはじめに、黎庶昌は「卜来敦者、英国之海浜、欧州之勝境也」と書き出し、そしてパレス・ピアーのことを実にユーモラスに描いている。「架木為長橋、闊入海中数百丈、使遊者得攀援凭眺」。橋の長さは「数百丈」と書いているのは、文学的な誇張にすぎないものであるが、確かに今日ではブライトンのパレス・ピアーは300mほども海中に突き出しているのであるが、黎庶昌の時代で「丈」は3.3mに相当する長さで、それを数百倍にすると、少なくとも1 km以上の長さになる。この文学的な表現について、ウェーリーは「Here too is a bridge, set upon wooden piers, that goes out several thousand feet into the sea, so built that wanderers, climbing to a height, may lean and gaze afar.」と訳している。黎庶昌の数百丈は文学的な誇張に過ぎないものであるが、ウェーリーの訳では、「several thousand feet」とし、「攀援凭眺」では「climbing to a height, may lean and gaze afar」としている。この種の文章に関して、ウェーリーは非常に漢字の文字単位の意味に拘り、文意よりも文字の正確な置き換えに努めているようである。続いて、黎庶昌は「卜来敦」の自然環境の描写から、人間活動の描写へと筆を運んでいく。

「人民十万、櫛比而居、衢市縦横、日闢益広　其地固無波涛洶湧之観、估客帆檣之集、無機匠廠師之興作、雑然而塵鄙也、蓋独以静潔勝」

今日のように「人民十万、櫛比而居、衢市縦横、日闢益広」になった以前に、ここはもともと「波涛洶湧之観」、「估客帆檣之集」が無く、「機匠廠師之興作」も無し、雑然とした「塵鄙」（片田舎）であるが、「蓋独以静潔勝」、静けさ、清潔さは外のどこよりもすぐれているという。そして、この静けさ

に、賑やかな雰囲気をもたらしてきたのは観光客である。「毎歳会堂散後、遊人率休憩於此」、毎年議会が終わると、観光客がこぞってここにやってきて休養をとるのである。このくだりについて、ウェーリーは「all is merged in dusty squalor.」「It is then for the quietness and cleanness of this place that each year, when the Hall of Meeting is closed, holiday makers with one accord come hither to take their rest.」と訳している。

「塵鄙」の正確な意味とは何か、ウェーリーは相当困惑していたようである。「merged in dusty squalor」としたのは、もちろんの誤訳である。「塵」というのは、ここでは物理的な「ちり、ほこり」としての意味を取らない。「塵世」という世間一般のことを指して言うものである。「鄙」というのは「いなか、ひな、郊外」などの意である。この言葉の不理解により、ウェーリーは、片田舎であるが、静けさや清潔さが売り物だという「蓋独以静潔勝」の文を訳せずに飛ばしてしまった。なぜなら、「all is merged in dusty squalor」の街に、静けさや清潔さが存在するはずがないのである。「塵鄙」という字面だけでは解釈できない、文化的な理解を必要とすることばに対する理解が不足しているから、矛盾が生じたのである。

ブライトンの景観について、「迨夫暮色蒼然、燈火燦列、音楽作於水上、與風潮相呑吐。夷猶要眇、飄々乎有遺世之意矣」という描写があるが、ここで言う「遺世之意」は、ブライトンの夜景に、世を忘れさせる仙境のような趣があり、そして、この雰囲気に惹かれて、主人公の黎庶昌は、世俗を忘れようとしている、という二重の意味が込められている。ここで黎庶昌は自分の感情を高揚させ、中国の文人趣味でもある「遺世」の情を歌い上げている。晋朝の陶淵明の「飲酒」詩に次のような句がある。

秋菊有佳色
裛露掇其英
汎此忘憂物
遠我遺世情

秋菊　佳色有り

露に裛れし其の英を掇る
此の忘憂の物に汎かべて
我が世を遺るるの情を遠くす

陶淵明は露に濡れた秋菊の花びらに、自分の遺世の情を托すように、黎庶昌も「遺世之意」を、忘憂の物――ここでは「卜来敦」の夜景、音楽――に汎(う)かべて、しばしの間この俗世間を遺(わす)れようとするものである。ウェーリーは黎庶昌の文を次のように訳している。「Dusk thickens, the lamps are lit, a row of flames darts up along the shore. The music, played above the waters, is caught up and cast back again by wind and tide, faltering in wafts of dim, mysterious sound, as though it floated from another world.」この訳では「遺世之意」はあくまでもブライトン、あるいは音楽を主体にしている。「借景抒情」であるはずの黎庶昌を主体にして、中国文人の「遺世之意」の趣を細部まで訳すことが難しいようである。

（三）

このブライトンの「遺世之意」の趣が、深く黎庶昌の心に沁みこんだようである。文章の後半で、彼はこのように書いている。「再踰年而之他邦、多渉名跡、而卜来敦者未嘗一日去諸懐」。イギリス駐在のあと、黎庶昌はさらに、ドイツ、フランス、スペインなどの国へ駐在公使の「参賛」として歴任した。その間多くの名勝旧跡を見てきたが、しかし、ブライトンのことが一日も脳裏から離れたことがないと黎庶昌は言う。ブライトンの黎庶昌に与えた感動の大きさ、あるいは、黎庶昌のブライトンに託した情の深さが歴然と描かれている。この部分について、ウェーリーは「Since then, years have passed and I have visited famous places in many lands; but never on any day has Pu-lai-tun been absent from my thoughts」と、黎庶昌のしみじみとした愛惜の念を再現している。

文章がいよいよ「点睛」である結びにいたるとき、黎庶昌は二つの典故を借り、ブライトンによって象徴されている英国の実態、及び自分のそれに対する認識、さらに自分の経国の論まで見解を述べている。

「英之為国、号為強盛傑大、議者徒知其船堅砲巨、逐利若馳、故嘗得志海内、而不知其国中之優遊暇豫、乃有如是一境也」

英国について、多くの人はその軍艦大砲の強さ、利益追求のための旺盛な競争心によって、勢力を世界中に広げたことは知っているが、しかし、この国に優々と楽しく過ごす一面もあることを知らない。この余裕があったからこそ、このような名勝をつくることができたものであると、黎庶昌は考えている。

「昔荀卿氏論立国、惟堅凝之難、而晋欒鍼之対楚子重、則曰「好以衆整」、又曰「好以暇」。夫維堅凝、斯能整暇、若卜来敦者、可以覘人国也」

昔荀子が立国のことを論じて、「国をただ形の上で統合することは、いくらでもできるが、統合した土地をしっかりと固く安定させるのは容易な事ではない」と言っている[4)]。さらに、晋の大臣欒鍼が、楚の子重に対して晋国の強みとは「常に軍旅を整える」こと、そして、その上に「常に余裕を与える」ことだと言っている[5)]。黎庶昌はこの二つの典故を踏まえ、「固く国を安定させること、軍隊を整え、人民に余裕を与えることの意味を、ブライトンを通じて窺うことができた」と、文を結んだ。

ここで黎庶昌が強調していることは、立国の要として、一は国を安定させること、二は人民に余裕を与えることだという二点である。そして、ブライトン見学によって、黎庶昌は、英国にはこの二点を持ち合わせていることを知らされた。ブライトンによって示された英国の安定と余裕は、まさに中国の古典に強調している「立国」の基本である。こういう意味で英国に学ぶべきところがあるという、黎庶昌の言外の意も含まれているのである。このくだりについてウェーリーは次のように訳している。

「In ancient days the philosopher Hswn Tzu spoke of the evils which come when lands think only of strength and security. But Luan Chen, when he appeared before the Baron of Ch'u, spoke first of the right ordering of the multitude and next in praise of leisure. It seems, however, it is strength and security which breed good order and leisure, and by the possession of a Pu-lai-tun a country's might may well be judged. 」

前文の「昔荀卿氏論立国、惟堅凝之難」に関しては、ウェーリーは「In

ancient days the philosopher Hswn Tzu spoke of the evils which come when lands think only of strength and security」と訳した。ここに「evil」ということばが出て来たが、確かに荀子は「性悪説」の主張をしていた。しかし、ここでの議論とは直接関係がないのであって、「惟堅凝之難」について、ウェーリーは正確な理解ができていないようである。したがって、ウェーリーは「But Luan Chen.....」というふうに、荀子とは反対な立場で欒鍼のことを取り上げている。

以上の文での黎庶昌の主眼は「夫惟堅凝、斯能整暇」である。これに関して、ウェーリーは「It seems, however, it is strength and security which breed good order and leisure」と訳し、黎庶昌の主眼については正確に再現はできたのである。

（四）

以上、黎庶昌の短文を通して近代中国人のイギリス観の一端を窺うことができたと思うが、黎庶昌は19世紀の中国人に英国のことを紹介する意図で、Brighton のことを『卜来敦記』に記した。アーサー・ウェーリーは20世紀のイギリス人に「A Chinaman's Description of Brighton in 1877」として、『卜来敦記』を Brighton ではなく、「PU-LAI-TUN」にして、中国的フィルタを一遍通したものを、英国人に還元して見せようと努力した。客観的な対象物Brightonが、黎庶昌の手によって「卜来敦」へと変身し、またウェーリーの手によって、さらに変容した「PU-LAI-TUN」として戻ってきた。その間に作者自身の文化的な背景により表出した恣意的な解釈が、たくさん盛り込まれていったのである。

文化的深層に関わる部分として、ウェーリーは満足の行く訳を示すことができなかったところもあるが、これは、まさに文化の翻訳はどの程度可能であるか、という普遍性のある課題を投げかけてくれたものである。それにも関わらず、アーサー・ウェーリーの訳文には創造的な側面がたくさんある。語彙の面においては、「Brighton →卜来敦→ PU-LAI-TUN」「England →英国→ Land of Ying」「London →倫敦→ Lun-tun」というふうに、わざと固有名詞を中国風に表記して、文全体に一種の東洋趣味を漂わせている。また内容的に

も、「A Chinaman's Description of Brighton in 1877」という設定に符合するように、西洋に疎い1877年の中国人の驚きや不思議を、大げさに取り上げている。ウェーリーの訳業は、文化翻訳の重要性、そしてそれに伴う難しさ、楽しさを思い知らせてくれたものである。

注

1）黎庶昌は西洋での見聞録を『西洋雑誌』八巻にまとめ、光緒26（1900）年に遵義黎氏刻本として刊行した。1982年、湖南人民出版社が『走向世界叢書』六に、これを収め再版した。

2）Arthur Waley（1889年～1966年）、イギリス Tunbridge Wells で生まれる。東洋には来た事がないが、独学で中国語や日本語を修め、数多くの翻訳や著書を著した。詳しいことは、*Madly singing in the mountains : an appreciation and anthology of Arthur Waley* edited with a preface by Ivan Morris. George Allen & Unwin, 1970を参照されたい。

3）桐城派（とうじょうは）　中国清代の古文家の一派。明の帰有光のあとを承け、方苞、劉大壮らが唱え、姚恣に至って大成。宋の性理学（義理）、漢の訓詁学（考拠）、唐宋の古文（詞章）があいまって学問が開けるとするもの。

4）「兼并易能也、唯堅凝之難焉」（兼并は能くし易し、唯堅凝を之れ難しとす）『荀子』「議兵」　新釈漢文大系５　明治書院

5）「臣之使於楚也、子重問晋國之勇。臣對曰、好以衆整。曰、又如何。臣對曰、好以暇。」（臣の楚に使ひせしとき、子重、晋国の勇を問へり。臣對へて曰く、好んで衆を以って整ふ、と。曰く、又如何、と。臣對へて曰く、好んで暇を以えす）『左伝』「成公十六年」　新釈漢文大系31　明治書院

※この論考は平成12年度札幌大学研究助成制度による研究成果の一部である。
小生にアーサー・ウェーリーに出会ったきっかけを作ってくれたのは、平川祐弘先生の「ウェーリー英訳『詩経』の一詩について」である。それは1988年春大学院に入学する直前のことであった。そして、2001年のこの春、アーサー・ウェーリーの故郷に旅立つ直前に、また先生から「ウェーリーの東洋文化翻訳」を寄せてくださった。心から感謝申し上げる次第である。

（比較文化・日中交流史／文化学部教授）